

ロマンの世界を駆けめぐる

稲嶺一郎 VS 仲里嘉彦

—— この度の春の叙勲では、勲1等瑞宝章を授賞誠にありがとうございます。大浜先生は本土における授賞でありますので、稲嶺先生は沖縄では最高位の勲章を授賞されたこととなりますので、われわれ120万県民として大変誇りとするところではありますが、これからも精進されてさらにその上の目標に向けて活躍して頂きたいと思っております。

沖縄が復帰する前の昭和45年に国政参加がありまして、先生は参議院議員として当選され、以来、3期参議院議員として活躍され、沖縄開発庁政務次官、自民党外交部会長、さらに現職を退かれてもアセアン協会会長として、とりわけ東南アジアと太いパイプで日本外交に大きな役割を果たされておりますことは衆知の事実ではありますが、この辺でこの度の授賞はどのような理由からであるかについても掻い摘んでお話を頂きたい。

そして沖縄が先生みたいな偉大な方が生まれたのには、その祖先を遡ってみる必要があるような気が致します。稲嶺先生の祖先には三司官をやられた方がおられるというふうにも聞いておりますが、その祖先の流れにも触れて頂いた方がよいのではないかと思います。

**稲嶺先生** 私は今から10年ぐらい前に政務次官をやった後に勲2等を授賞しているんですが、その後外務委員長をやったり、アセアン協会会長として現在においてもつづいておりますし、東南アジアにも多くの友人がいて親しくつき会っておりますが、また政治家をやめていても、まだいろんな問題で相談に乗ったりしているわけです。

これらの仕事もよい先輩に恵まれた結果が、今日の授賞につながったんじゃないかと思っております。

それから先程話がありましたように、私が国会に出て、外務委員長を経験して感じることは私の先祖に稲嶺親方盛方という方がおりまして、薩摩入り後における琉球王朝の三司官になっているんですね。

それを考えると沖縄が米軍に占領され、日本が負けたということや、27年間という長期にわたる異民族支配体制下において国政参加が実現したことは何か因縁みたいなことを感じます。

国政の難しい時期に国の役に立つような使命を背負わされているような運命を持って生まれてきたんじゃないかという気がします。

第2次世界大戦のときは潜水艦にやられて、九死に一生を得たりしたことも1つの運命的なものを感じますね。

インドネシアの独立運動に参加して刑務所に1年間入ったりしたことが、私にとってはよい経験になったと思います。人間というのは経験以上の何ものではないという感じをするんですね。

ただ、自分を犠牲にしても東南アジアのために、自分はどのような役割を果たせるかとい

う点から考えると、どんな危険な状況におかれていてもそれを逃れて、やらなければいけない仕事というものが待っているという感じがするんですね。

—— それは運命的なことでもあり、また神の加護があつてのことだという気は致しませんか。

先祖の歴史をたどっていくと稲嶺一郎先生という方に対し先祖が見守って、行動に誤りのないよという暗示がかけられているという気はしませんか。

**稲嶺先生** それは運命的なものを感じるね。

私は外交問題に関係し、世界平和を最も主張した方なんです、それも薩摩が琉球へ侵略する前の三司官も私の先祖なんです。彼は平和論を主張しているんですね。そのために三司官をおわれてちっ居を命じられたんですね。何故彼がそんなに平和論を唱えたかといいますとね。彼の弟が京都の妙心寺で7年間修業していたんですが、そのとき京都や日本の情勢について、逐一報告していたものと想像されます。

そのようなことから、強行に薩摩との平和を主張したんです。とうとうそのために三司官まで犠牲になって、ちっ居を命じられたんですよ。

よく薩摩問題をあれこれ言う人がいるんだが、私は戦略はなかったんだと思いますね。その時の琉球王朝は武器は何もないんですからね。そのときに強行論でいくんだから、これは今の日本においても参考になると思います。

現在において、軍備を全くもたない方がよいという考えの人もいるし、日米安全保障条約もない方がよいというんですが、何故40数年間戦争が日本にはないかということをよく考えてみる必要があると思います。これまでは10年ごとに戦争はあったわけですから、第2次世界大戦から40数年間戦争がなく、また、他から侵されることがないということは、お互いが助けあう力がうまく作用したからだと思うんですよ。

武器を持たずに平和を主張しても、それは絶対出来るものではないです。

—— 先生は本部でご出生され、早稲田大学を卒業されて満鉄に入社され、世界各国をお廻りになり、あとでバンコク事務所長にもなったり、正に世界をまたにかけて活躍されたわけであります。そのことが世界的視野から日本がおかれている立場を考え、あるいはこの日本の中で沖縄がどのような役割を果たすかについて、絶えず広い視野から物事を判断出来るという貴重な経験をされたわけでありますが、それについては戦前から戦時中、戦後の混乱期を迎えられるわけでありますね。

それらの貴重な経験を踏まえて、国政において政治家として活躍され、とくにアセアンを中心とする外交面に果たしてきた役割は大きいものがありますし、政治家として、または沖縄経済界の重鎮として果たした功績が、今回の勲一等瑞宝章の授賞に結びついたと思いますね。

その陰には、海外を点々と渡っている間においても奥様には大変ご苦勞をかけたことなどを考え合わせると今回の授賞に結びついたのは、内助の功が非常に大きかったというふうに思いますので、早稲田をお出になってから戦前、戦時中、戦後の混乱期を回想して頂く

と同時に、つらつら奥様への労へのねぎらいの言葉をお聞きしなければいけないと思っておりますが……。

**稲嶺先生** 私が早稲田を出て、満鉄に入社してからアメリカに渡ったのは30歳のときでした。アメリカは1年間で、それから1年間はヨーロッパで合わせて2年間海外での生活をやったわけです。

それから日本に帰ってきて1年半経ってから、将来ソビエトがインド洋に出てくるであろうということから中東方面を視察してこいということになりまして、34歳のときに中東に1年間ぐらい派遣されたわけです。

それは、満鉄の先輩が海外に出て勉強しなさいということでしたが、これらの海外生活が自分の将来に大きく影響を与えたことは言う間でもありません。

—— それから満鉄のバンコク所長をやっておられますね。

**稲嶺先生** それは中東から帰ってきてからです。

バンコクは3年間でしたが、そのうち1年間ぐらいはビルマに行っていたんです。3年経ちまして本社に帰るときに、先程も話しましたように運が悪く潜水艦にやられて船は沈んだわけですが、ところがわれわれを助けた船が高雄に入港してキャンプに入ったんです。500人ぐらいの数でしたが、そのうち私だけが腹痛を起こして病気になったものですから、沖縄出身の嘉数さんという方が病院を開業していたので、そこに入院したわけです。

私が入院している間に他の連中は北に立ったということでしたが、東京に帰ってきてから聞いた話だと南支那海の高雄で助かった連中は沖縄近海で、また潜水艦にやられているんですね。

われわれの乗ってきた船は、朝鮮近海から下関に入っております。それらの出来ごとをいろいろ考えますと何か運命的なものを感じざるを得ませんね。それから日本に帰ってきて東京支社に行くと今度はインドネシアの海軍武官府が君を指名して派遣してくれとの要請があるが、どうするかというんですね。それを君に連絡しようにも1ヶ月ぐらいまったく連絡出来ないじゃないかといわれました。その当時は電報も打てないし、現在のような通信施設網が整備されていませんでしたからね。船は沈むし、連絡しようにもその手段がまったくないわけですからね。

インドネシア行きについては、10日以内に返事をしてくれということでありましたので、私の運命も南方にあるという気がしておりましたので行くことにしたわけです。

そのときは昭和19年頃で、日本も戦争に負けつつあるものですから、結局刑務所に1年間はいる運命になったわけですがね。私は刑務所に入れられてよかったと思っております。

—— インドネシアの独立運動が原因で先生は刑務所での生活を1年間、余儀なくされるわけですが、その独立運動はオランダからの独立運動であったのか、またはイギリスからでしたか。

**稲嶺先生** 当時はオランダは力がなくなっているから、インドネシアに進駐して来たのは、オランダではなくてイギリス軍でした。そこでみな忘れていけないのは独立宣言とい

うのがあります。それが起草されたのは前田さんという海軍武官で少将がおりましたが、その方は非常にインドネシアを愛していたし、独立を希望していた日本の代表的な方でしたね。

昭和20年8月15日に日本は戦争に負けたわけですが、その翌16日の晩に前田さんのところに後にインドネシア大統領となったスカルノさんをはじめ、インドネシアの代表者がみな集まって、そこで彼らがインドネシアの独立宣言を起草したわけです。

われわれは、その独立宣言文が起草されている隣の部屋において、日本の将来がどうなるかについて話し合いをしていたんです。

その当時は陸、海、空軍とも日本はアメリカにやられだめでしたからね。

私は敗戦になると沖縄が心配になったんだが、ジャカルタに漁港がありまして、そこで県出身者が多く働いていたものですから、全部集めまして、インドネシアの独立をさせるべきだと説明してやったりしたわけです。

確か山本茂一郎さんという少将で、当時の司令官をしておられ、後で参議院議員になりました。その人が日本軍の武器をインドネシアに渡してはどうかという話もあったりしていたんですが、その当時のイギリスの情報網というのは大変なものでしたよ。

沖縄の皆さんと一緒にいるところをピストルを持ったイギリスの将校が2人で来て直ちに刑務所へ連れて行かれた。それはインドネシア独立運動に参加したことが理由でしたが、それから1年間刑務所にいれたわけです。

今日1日の情報を逐一文章にして、金子智一君が正確にパンの中に情報を入れて極秘に、山本少将に厳しい看視の状況の中で情報を提供していた。

当時、私はカンカンたきのおじさんと呼ばれ、缶詰のあき缶で食器をつくったりしていました。食料を運ぶのは金子君でした。金子君が先に刑務所を出たので、私はカンを金子君に預けましたが、そのカンを預かった金子君は、必ず沖縄で偉くなるだろうと思って10年間預かっていましたが、私が65歳で参議院になったとき記念にそのカンを家内に下さった。

—— そのときご家族は一緒になかったんですか。恵一さんも学校に上がっておりますし、その辺についてちょっとお話下さいませんか。

**稲嶺先生** 家族は東京で、私だけがインドネシアに行っていたわけです。

私が今でも感謝しているのは、結婚してから生活をともにしたのは半々ぐらいじゃないかと思いますが、それに対して、何1つ不平をいわないわけですね。

その間に他の連中はみな帰ってくるのに、私が刑務所には行って帰ってこないものですから、家内は外務省に行って直接聞いたというんですね。

それから、タイ時代の友人がカネボウの銀座支店長をやっていた守谷さんから、デザイナーとしての腕を見込まれて、戦後の仕事もなく、食べものもない混乱の時期に仕事を与えてくれた友人には感謝しているんですよ。

その後、わりと有名なデザイナーとなりましたよ。

無茶苦茶な生活をやってきた私に家内は1度も不平をいったことがないんですよ。その

ようなことを考えると今日私があるのはこれらのことに大変深い関係があるんじゃないかという気がしますね。

—— もう少しずばりおっしゃって頂けばよろしいと思いましたのに……。

先生が結婚をされ、子供が出来てきますと一般的に一家団らんを楽しむことが幸せの象徴みたいにいわれておりますが、先生は殆ど海外での生活をされたわけですね。例え使命をおびた仕事とはいえ、家庭を犠牲にしたという良心の呵責の念をおぼえるというお気持ちはあったんでしょうし、もし仮にあったとしたら、何をもって奥様や子供への償いをやられたか、その辺をたんとお伺い致したい。

**稲嶺先生** 家族のことはまったく考えなかったね。日本の将来がどうなるか、沖縄の運命はどうなるのか、そのようなことばかり考えていましたね。自分自身がどうなるかということについても余り考えませんでしたからね。

それは満鉄時代に非常によい先輩に恵まれたからなんですね。国鉄総裁をした十河信二氏なんかにも大変かわいがられましたね。

私が参議院に当選したときは、氏は90数歳の頃で、秘書の案内で私のところにこられて、君にとくに用事があってきたんじゃない。君は2回も当選したんだからこれからは自分のことは考えるなどそれだけを言いに来たんだといわれてすぐ帰っていかれました。

そのような、りつばな先輩達に多くめぐり会ったということも人生において大きな財産となりますね。

満鉄時代に東南アジアから中東方面へ満鉄の先輩の田所耕転さんに同行したのも、将来は紛争の火種になるという先見性があったからでしょうね。今のイランからアフガンに行く場合も大使館は危険だから、その方面は避けなさいというんですよ。ずーっと砂漠を通るわけだから大変なんですよ。命が危ないからといって、会社と約束してきたからには、目的を達成するのが自分の使命だと強調したんですよ。

そうしますと、日本大使館もそれだけの決意をしているならば、行っていらっしゃいというふうに言われました。そのかわり、いっさい武器を持つなといわれ、その日の明るい内に泊るとこまで辿りつくようにして、途中賊に襲われることがあったら、抵抗せずに持ち物を全部あげろということをお教えました。そうすれば命だけは助かるというんですよ。

今でも、印象に残っているのは、カブールに行く途中までに自動車が2回もパンクしたんですね。途中で大きな河があって、そこにはフェリーが停泊しておりました。午後の8時をまわっておりましたが、フェリーが止まって動かないので、車の中でとうとう一夜をすごすことになったんですよ。

砂漠地帯ですから、昼と夜とでは温度が10度以上も違うものですから、夜は寒いわけです。オーバーや持っていた毛布を掛けますが、寒いわけです。ところが、今にも賊が襲ってくるんじゃないかという不安がありますから、寝つかないわけです。それにしても砂漠の星は輝いておりましたね。

古葉に触れたら、ちょっとした、ざわざわする音さえ遠いところでも聞えるんですね。賊

がいつ襲ってくるか身がまえ、神経はピリピリしているわけですから、寝つけるわけがないんですよ。しかし、まんじりともしない一夜をすごしましたが、何事もなかったのも運命的なものを感じますね。

—— それから先生、イラン、イラクの中東ですけれども、昔はメソポタミア文化が栄えたところでありますが、その辺の面影みたいなものと、何か感じませんでしたか。

**稲嶺先生** イラン・イラクなどの中東の場合は砂漠とオアシスがあるんですが、オアシスでは生きることが出来るが、砂漠では生きることが出来ないわけですよ。

戦争にあって負けた場合は砂漠の方に逃げたら死を意味するわけですから、生き残る為には徹底的に戦わねばなりません。その点から考えますと、イラン・イラク戦争は理解出来ませんね。中東の連中は何回となく戦いを繰り返したんでしょうね。

今から 800 年前の源平合戦などにおいて、負けたら逃げれば命は助かったんですが、中東の場合は負けたら砂漠に逃げるから生き残れないわけですよ。

われわれが満鉄に入った頃は、ロシアや満州においての冬は厳しいから酒を飲んで道に寝てしまうと、明日は堅くなっているから注意しろとよく先輩からいわれたものです。

東京や沖縄では酔っ払って道ばたに寝ても、凍りついて死ぬことはないが、満州やロシアは寒いわけですから注意してくれたと思うんです。

ソビエトにしても、摂氏零下 40 度以下になったりするから、人間が生活していく上で、自然環境が厳しいわけです。そのような自然環境からして共産主義体制が、東洋や欧米に比べて浸透しやすかったバックグラウンドがあるわけですよ。

東洋や欧米においては砂漠とか厳寒な自然ではなくて、人間生活の上で比較的しのぎやすさがある。そのような自然に恵まれた国と、そうでない国とでは、人間の物の見方、考え方も支配する力を持っていると私は観ているんです。

このように、気候の違いは人間生活にも大きく影響しますし、民族性にも表われてくるような気がしてなりませんね。

私が自民党の外交部会長をやっているときに、国際ジャーナリストの連中と記者懇談会を持ったんだが、その時にインドから派遣された記者が東洋のイスラム教徒と中東のイスラム教徒と違うというんだな……

また、中東においてはイスラム教徒とキリスト教徒とはなかが悪いんだね。それまでも何千年の戦いを繰り返しているわけですが、それに宗教の違いで敵対するという不幸な歴史があるからだと思うんだね。

中東には砂漠とオアシスしかない。砂漠では人間生活は出来なくて死に追いやる厳しい自然があるので、戦争になれば負ける方は砂漠で死ぬ以外にない。それが各宗教間の激しい戦いにもなってくるんじゃないかなあ……

ところが、インドネシアになると、クリスチャンの大將や大使などいるくらいですから、イスラム教徒とキリスト教徒およびヒンズー教、さらには仏教もあるが、お互い仲が良いんですよ。

国によって違いがあるように、宗教においてもそれぞれの国によって受けとめ方が違うのは、また当然のことかも知れませんね。

さらに、気候風土の違いは宗教の上においても、人の心にも大きく影響する要素になっているという感じをしております。これから日本が中東をはじめ、世界情勢をみる場合において、よく研究していくことが大切なことであると思います。

そのような物の見方、考え方は中東方面を視察してみて感じましたね。海外を調査、視察してからわが日本をながめているといろいろな発想が生まれてくるし、また今までに感じなかったことが、よく見えるようにもなってくるんですね。そのような意味で海外視察を数多く体験したことが、私の今日まで歩んできた道程において大変意義深いものであったと感じております。

共産主義がロシアに入ってしまったのは、気候風土とも関係があるんじゃないかと思われまます。厳寒な国であるだけに、人間が生きていくためには厳しすぎるわけです。それに対し、ヨーロッパのイギリスやフランス、ベルギー、オランダ、イタリア、ドイツでは共産主義が入っていかない1つの理由には、気候・風土そのものが人間生活をおよぼす影響があるからだと思えますよ。

私は、世界全体を見て回ってきておりますから、このような体験をしてきた人間は、全国的にみても数少ないと思えますよ。

—— そうでしょうね。私は先生のご紹介を受けてアラムシャ大臣にも会いましたが、インドネシアに滞在した1週間で、いろいろな体験をさせて頂きました。ここでは詳しく述べるわけにはいきませんが、ただ1つヒゲを1日2回剃るというんですね。

朝7時に日が昇り、午後7時に日は沈むんですが、それは赤道直下ですから365日その時間帯は変わりませんですね。人間のヒゲが1日2回剃らないといけないぐらい成長が早いわけですが、樹木においても、20年から30年になると、巨木に成長するんですね。私がある時に感じたのが、インドネシアの平均寿命が日本に比べてはるかに低いということも気候そのものの影響を大きく受けているんだという感じを受けましたね。

ところで先生は、インドネシアの独立運動をやっているときに、イギリスの将校に捕まえられて、結果的には1年間刑務所暮らしをされたわけですね。それから釈放されて日本に帰ってきたわけですが、どのような思いを抱いて日本の土を踏まれ、どのような仕事をやられたんですか。

**稲嶺先生** インドネシアから帰ってきて、すぐに在日沖縄人連盟の副会長を東京でやらせられました。会長は大蔵省名古屋専売局長などをやられた神山さんでしたが、私が英語が出来るものですからGHQとの交渉等をよくやらせられました。

GHQの琉球担当課長はたしか准将だったと記憶しておりますが、その方といろいろ意見交換をかわすうちに親しい仲となり、沖縄の実情を調査する便宜を計ってやろうということになったわけです。

この調査結果については、稲嶺レポートという形で報告書を提出致しました。

その結果だと思いますが、外国郵便料金と同じぐらい本土に対しても高かったんですが、報告書を提出して間もなく郵便料金が大幅に値下げされたことや、米軍政府の人事等もあり、それにも報告書が結果的に生かされたと思います。

—— 終戦直後の混乱した中において、沖縄全県下の視察を許されたことは先生の人柄が評価されたことに加え、30歳から世界各国を廻られ、外交手腕についての蓄積があったからこそだと思いますね。

ところで沖縄視察はどのようなかたちでなされたかについて、お伺い致したいと思います。

**稲嶺先生** それは昭和24年頃だったと思います。

その当時は、志喜屋孝信元行政主席や比嘉秀平元行政主席など数多くの方々のお迎えを受けました。

米軍占領下の沖縄ですから、戦禍の傷跡は生々しいものがあり、本島をはじめ、八重山、宮古などくまなく廻りましたが、一緒にいってくれた方は、当間重剛元琉球政府行政主席の実弟にあたる当間重民元那覇市長でした。

各地域の住民の意見をいろいろと聞いたんですが、そのなかにはアメリカの占領政策に対する考えを率直に話してくれました。

そのような住民の声を率直に報告したんですよ。私に現地沖縄視察の便宜をはかってくれたGHQの琉球担当の課長はすぐ帰国致しましたが、先程も触れましたように、その報告が生かされたと思っております。

東京に帰って間もなくして、沖縄から電報がきて琉球水産連合会をつくるので、その会長就任の要請があったんです。そのようなことから私は沖縄に引きあげることになったわけです。

—— そのあと琉球石油を創立することになるんですね。

**稲嶺先生** 戦後石油の販売権は、すべて米軍がにぎっていたんです。それを民間に移管したので、そのために20万ドルの資本を集めるように米民政官にいわれたんですが、当時は1ドルでも大金でしたから、20万ドルという資金をどう調達するかで苦心したんです。

米軍から民間への石油販売権を移管するための委員会が出来まして、私とその委員長になったわけです。

しかし、20万ドルという莫大な資本をどうしても限られた期間内に調達が出来ないものだから、私がうそをついたんです。当時大城鎌告さん外3名の方々が所有していた土地を担保にして銀行からお金を借りて、20万ドルの株の資金が集まったというふうにごそをついて、それを軍に提出したわけです。

その時の民政官がセーファーという大佐で、大変私に好意を持ってくれました。セーファーマ大佐の使用人が3名おりました。その3名にそれぞれ100ドルずつ株券を与えてくれました。それも資金集めに苦労している私の立場をよく理解していたので、その好意で100ドルの株を出したんですよ。当時は1ドル株主もいるころですから大変な資金でしたよ。

やはりお互い胸襟を開いて話せば、国はちがっても人間としての心は通じあうものだとつくづく感じましたね。

私はセーファー大佐が帰国する際、ゴルフ道具一式を記念にもらいましたが、当時としては沖縄では誰もゴルフ用具など持っていない頃、大変めずらしがられたものです。

現在においても、そのゴルフ道具一式は大切に保管しております。

—— 戦後米軍政府は、石油販売の民営化を図るための石油販売事業民営化に関する公聴会なども持たれたようですが、その辺の事情と申しますか、背景等についても伺い出来ればと思っております。

**稲嶺先生** 私が本土から引き上げて間もなくして、琉球水産連合会会長に就任したすぐ後に、米民政府は石油販売の民営化に向けて具体的に動きはじまったわけです。

1950年6月27日、米軍政府首席民政官のセーファー大佐によって、民間各産業団体の代表が琉球貿易庁に招集されましたね。

その時に琉球貿易庁の企画局長は現沖縄銀行会長の瀬長浩さんでした。石油会社設立に関する米軍政府招集の第1回公聴会出席メンバーは、琉球水産連合会会長の私のほか、佐辺良夫さんが当時の沖縄群島政府食糧局補給部衣料雑品課長、山城栄徳さんが沖縄農業組合連合会会長、前田義次沖縄工業協会会長、真栄城守行琉球工業協会会長、久保田盛春自動車協会会長、宮里辰雄元琉球貿易商事社長、長嶺彦昌沖縄水産組合連合会会長、金城増太郎琉球農業組合連合会会長、照屋知広沖縄海運協会会長、平尾喜一元新垣平尾バス社長、中山良輔沖縄バス社長等のメンバーでした。

セーファー大佐は、この席で油脂類の販売事業を民営に移すことを通達し、集まった各産業団体の代表に対して、各自の立場から、これに関する意見書をまとめて5日以内に提出するようにと指示されました。

一方、こうした米民政府内での動きを背景に、民間側でもその動きはすでに持っていました。その発端となったのは、セーファー大佐から私に対して、非公式の形で「石油販売に関して民間移行について検討中だが、民間側としても、受け入れ態勢を検討してくれ」という相談があったんですよ。

その頃、私はセーファー大佐との関係は、仕事を通して信頼関係が深まりつつありましたが、石油会社設立に関する相談もまた、こうした信頼関係の中で出てきた話なんです。

私はセーファー大佐の依頼を受けて、その時から民間側にまとめ役として動くことになったわけです。

—— 戦後の混乱期に米軍管理下にあった石油販売を民間に移管することになるわけですが、琉球石油設立の背景等について話題を展開して頂きたいと思います。

**稲嶺先生** 琉球水産連合会は沖縄本島をはじめ、宮古、八重山、奄美大島を統括する組織であったが、間もなくして石油販売も民間に移行するという話が、セーファー大佐から示されたことについては、先程触れた通りです。

昭和24年には琉球銀行、琉球海運、沖縄バスなど数社のバス会社が設立され、今度は沖縄

の産業振興に重要な石油販売についても米軍政府から民間への移行をすすめることになったわけです。シーツ長官は、24年就任以来、米軍管理業務の民間移行を積極的に進める政策を打ち出したわけです。

昭和25年6月27日、米軍政府の招集で、石油供給事業の民間移行に向けての初公聴会が開かれたことは先に触れた通りです。

—— この石油販売の民間移行についてはどのような場所でどのような形でもたれたんでしょうか。

**稲嶺先生** 場所は、米軍の直轄機関として設置されておりました琉球貿易庁の一室でした。

それは、民間側の受け入れ準備を整えるため、琉球水産連合会で会合をもってから、10日ぐらい経過した頃だと記憶しております。

そのときの世話役は、当時、琉球貿易庁の企画局長をやっておられた瀬長君、現沖縄銀行会長でした。

招集されましたのは、民間産業5団体と戦前の石油業者と、戦後の石油配給事務に携わっていた関係者たちでした。

これまで石油は、軍の余剰物資またはガリオア援助物資を米軍政府が民間に配給していたわけです。

そこで、ガリオア資金の制度について若干説明しておきます。1946年ごろまで、米軍の援助は、戦時物資処理によりまして、米軍の余剰物資が支給されておりました。余剰物資は、日本進攻に備えて大量の物資が沖縄に搬入備蓄されたものであると言われております。

しかし、1946年7月以降に余剰物資に加え、ガリオア援助が適用されるようになったわけです。ガリオア援助は、全世界にわたる米国占領地域の飢餓、疾病の不安などを防止するうえで必要な物資や役務を提供することを目的に、1946年6月米国議会の議決によって設定されました。占領地域の行政および救済基金として創立されたものです。

その特質は一般的には……第1の仕事は単に生きていけるようにすることであったという表現にもみられるように、食料品援助を主体に、占領地域の住民を飢餓と不安から守るいわゆる救済的性格のものでありました。それでも、戦後の混乱期にこの制度が創立されて沖縄に適用されたことは多くの沖縄住民が飢餓からすくわれたといえると思います。

しかし、これからは、沖縄人が使う石油については、カルテックスから仕入れて、民間石油販売会社が供給することにするが、その場合においても米軍政府は、できる限り援助するというセーファー大佐のあたたかい気持ちに感謝しております。

石油はご承知の通り、すべての産業を支える重要なエネルギーであり、どの産業においても公平に供給されなければいけないという米軍側の基本姿勢であったわけです。

また、消費量の少ない住民に対しても同じ考えであったわけです。

沖縄の復興を図るためには、石油価格を出来るだけ安くし、また安定した供給を果たす必要があったわけです。

—— それで米軍政府の管理体制下において、琉球石油がスタートすることになったわけですね。

**稲嶺先生** そうです。石油の販売に関しては、民営ではありますが、米軍政府の管理の下におかれ、必要なアドバイスと必要なテコ入れをやることを条件につけたわけです。

それから1週間後の7月5日、同じメンバーが米軍政府の会議室に呼ばれまして、各自が意見書を提出したわけです。

その意見書をもとに討議が行われまして、その結果、民間側の合意事項は、石油供給事業の民営化は、1つには沖縄の自立経済の発展を寄与するものとして歓迎する。2つ目は全琉に1社を設立すること、3つ目には沖縄産業界は保護育成期にあるため、石油消費者側に貢献できる会社を設立することなど3点に集約されたわけです。

—— そのような、沖縄の経済団体を中心とする石油販売会社設立に向けた公聴会などの意見は、米軍政府はどのような態度でしたか伺い致します。

**稲嶺先生** セーフアー大佐は、私も皆さんの意見に全面的に賛成ですという回答でした。

とくに、一部の事業家の独占は避けるべきだという意見は重要だという考えを示してくれました。

石油事業は、公共性のある事業でありますから、産業界全体、一般消費者全体のために役立つ会社を設立すべきでしょう、というセッションを与えてくれました。

骨子は、今日皆さんが合意をみたポイントをそのまま生かすこととして、各産業界団体の代表者が発起人となって設立準備をすすめて下さいとの指示をしてくれました。

その日も午後私は再び米軍政府に呼ばれ、担当係官から、「ミスター、イナミネ、セーフアー大佐から指示がありますので」ということで、次の指示がありました。

1つ目には会社設立の具体案を7月10日までに提出すること、2つ目には新会社の販売対象は当面、沖縄人のみと考えることの2点が示されました。

わずか5日後に会社設立の具体案を提出するように、各界の代表者の合意を取りつけるための会議を開き、さらに具体案を英訳しなければならないという切迫した状態であったんです。

琉球水産連合会における設立準備は、7月5日の公聴会后、急にあわただしくなってきましたが、その日に設立準備委員会を設置しました。

あの時代に会社を設立することは、容易なことではありませんでした。ことに、石油販売事業となると設備面においても大がかりな準備が必要です。それに膨大な資金も必要になるわけです。現在のような豊かな時代と違って、戦争ですべてを失った沖縄で、一体どれだけの資金が集められるのか不安がありました。

先ほども触れました通り、琉球銀行や海運、陸運、バス会社等復興を目指してつぎつぎと会社が設立されたあとに、資本金20万ドルを集めるのには大変苦勞をしたんですよ。あわただしい中で琉球石油の設立準備はいよいよスタートすることになったわけですが、その設立準備事務所を私が会長をしている琉球水産連合会内に設けたわけです。ところが、琉球石

油の方が多忙となりまして、それにつれて出入りする関係者も増えてきて、どちらか居候の身分が分らなくなってきたわけです。

—— そこで樋川の旅館で徹夜に近い状態で仕事をやられ、いきぬきに囲碁をやったりしたんですね。

**稲嶺先生** 琉球水産連合会の事務所は終夜灯ではなくて、9時になると電灯が消えるから、当時自家発電装置がついていた樋川旅館にスタッフを引きつけて仕事をしたわけですよ。

樋川旅館は、城岳近くの樋川というところにあって、那覇高校からもごく近いところでしたよ。樋川旅館から平和通りまで歩いて10分ぐらいの距離でしたし、また、琉球水産連合会の事務所のある旭町まで交通機関もありませんでしたので、30分間ぐらい徒歩で通勤したんです。

あの頃的那覇市街は、焼け野原にバラック建てがポツリポツリという風景でした。樋川旅館の近くにあった城岳から国際通りはおろか東町、久茂地、松山まで一望できたものです。

—— 沖縄の復興を目指した琉球石油の産声をあげるための様々なドラマがその樋川旅館において展開されることになるわけですね。

**稲嶺先生** まったくその通りですね。樋川旅館時代のエピソードは、数えあげればキリがないですよ。スタッフに取っては涙と笑いのドラマが展開され、沖縄の夜明けをつげる石油販売会社としての琉球石油の誕生準備が着々と進められたのも、その樋川旅館を抜きにしては語れないんですよ。

それこそ24時間行動を共にすれば、カッコ悪い事件も続出することになるわけです。例えば、カミさんのいる者は例外なく疑われたものです。毎晩外泊とはケシカランということになるのも無理からぬことですからね。そんなとき、私が弁解役を買って出て、奥方に詫び状をよく書いたりしたものです。

その当時、前森正一君は琉球海運の社員でしたが、事務員として手伝ってもらうことにした。前森君は以前、沖縄民政府の翻訳課長をやっていたこともあって、琉球銀行の創立事務や琉球海運創立事務などを手伝い、琉球海運の社員として働いていたが、当時の桃原茂太社長に私がお願いをして、琉球石油が一段落つくまでの期間、応援することになったわけですよ。

前森君などは、あそこ佐敷の新里から通っていましたが、樋川旅館泊りは交通機関も不便な時代だから自然と多くなってくるわけです。深夜になって仕事を切り上げて帰ることができない。前森君はまだ新婚時代でしたが、彼に残業して手伝ってくれないと米軍政府に提出する書類が間に合わなくなるから仕方がないわけです。

樋川旅館時代で思い出すのは、皆、揃いも揃って酒豪でよく酒を飲んだものです。

琉球水産連合会も設立させ、煩雑な時期を一応乗り切った1950年9月のことです。樋川旅館でもトーフチャンプルやゴーヤチャンプルをつまみによく飲んでいましたが、料亭へもしげしげと足を運んだものです。

料亭といっても、戦後5年後のことだから、高級料理はなかった時代で、仮りにあったと

してもそのようなところに入出入りできるような財政状態ではありませんでした。一杯飲み屋みたいなものでしたよ。「料亭左馬」もそのころまでは栄町にあって、よくいったものです。「幸楽」もその近くにあったし、いずれも馴染みの店でなつかしい思い出があります。

私の場合は、昔から余り飲める口ではなかったんですが、それでも、周囲の飲んべえにつられてよく飲んだものです。

おそらく私の生涯を通じて、最も酒をたしなんだ時期ではなかったかと思うんです。その飲んべえ達とは、平尾喜一、長嶺彦昌、新垣正栄、翁長自敬、佐辺良夫、大城鉄一、前森正一、新垣繁などご存命の方々には今でも思い出となっていると思います。

—— 琉球石油設立にまつわるご苦労話やエピソード等について後から伺うことにして、米軍政府の支援を受けて民間企業の創設の気運が高まってくるわけですが、その辺についてもう少し詳しくお話を頂きたいと思います。

**稲嶺先生** 戦後の荒廃した中から県民の安定した経済体制を確立するためには、どうしても民間企業を興すことであり、企業活動の円滑な運営をするためにも、施政権者である米軍政府の理解と協力が必要な時期であったといえると思います。

戦争によって廃塵と化した沖縄において、人口の集積度の高い那覇には戦後間もないころから、ヤミ市場が統制経済下においてにぎわっていましたが、ブラックマーケットはいつ摘発されるかという危険と不安の隣り合わせのギリギリの生活防御手段であったといえるんでしょうね。

もちろん、手工業みたいなものはぼつぼつ出てきていましたが、沖縄経済の復興のきざしが出てきたという表現はちょっとオーバーになるでしょうね。

何ととっても、復興の基幹をなす多くの民間企業が米軍政府の主導のもとで、ガリオア資金のバックアップやエアロ援助が新しく適用されることになったことは、沖縄の戦後復興にとってきわめて重要な意味を持つものであったわけです。

ガリオア資金については、先にも説明致しておきましたが、エアロ援助は救済を目的としたガリオア援助と性格を異にし、文字通り経済復興を目的としたもので、1949年度だけでも総額1,156万ドルの割当てを受けております。

このように、米軍政府の沖縄経済復興政策が展開されるようになって、沖縄の本格的な意味でも経済復興が大きく踏み出したのが、今日の繁栄に結びついているといえると思いますね。

1949年にはガリオア資金の援助をもとに沖縄運輸株式会社、合同トラックがそれぞれ日本から自動車を輸入がはじっております。

それに続きまして、沖縄バス、協同バス、首里バスが相次いで設立されて、住民の足が確保されることになっていくわけです。

1950年2月には、戦後初の民間海運会社が発足したわけです。

戦災で殆どの船を失い、残存船舶はわずか全県下に4隻しか残っておらず、昭和21年5月に沖縄民政府に海運課を設置して、米軍よりLSTなど22隻の戦時型船舶が列島間の輸送に

あたっていたと、琉球銀行が発行した戦後沖縄経済史に記されております。

琉球海運は、昭和24年11月にシーツ政策の一環として民間海運会社設立の内示があつて、軍政府にあった琉球海運部が発展的に引き継いで出来たのが、今日の琉球海運です。その初代社長の桃原茂夫さんとは随分親しくつきあいがありました関係から、琉球石油設立業務の中心的な役割を果たした前森君についても、桃原さんをお願いをして、琉球海運からかして頂きたいきさつがあつたことは前にも触れた通りです。

昭和25年7月には、軍政府の食糧配給機構を民間に移管しまして、沖縄、宮古、八重山を包含する沖縄食糧と大島を担当する大島食糧の2社が設立しております。

さらに、昭和25年6月に琉球火災保険、昭和27年6月には琉球生命保険、同年10月には琉球水産などが相次いで設立され、沖縄経済も順調な足どりで復興していった時期でもあつたわけです。

—— その頃から米軍基地建設ブームとか、朝鮮動乱によるスクラップブームが起きて沖縄の景気も量的拡大が図られていくんですね。

私もスクラップブームの時期は鮮明に記憶しております。山や畑に米軍が投下した薬草や真鍮などの非鉄スクラップや、鉄スクラップが飛ぶような値がついて売れるものですから、随分家計のたしになったものです。

当時、沖縄の最大の輸出産業としてスクラップが、沖縄経済復興に果たした役割を考えると、奇妙なる気も致します。

**稲嶺先生** 昭和26年から昭和28年頃にかけて民政の安定を図る必要から、さまざまな政治、経済政策を展開し、戦後経済復興の制度や枠組みづくりに着手しております。

このような政策の導入によって、沖縄経済の量的拡大を促進することになったのが、朝鮮動乱であつたわけです。この朝鮮動乱を契機として、急ピッチに進行した大規模な基地建設工事であつたわけです。

昭和25年から昭和28年にかけて、約2億7,000万ドルといわれる莫大な資金が投下されたといわれております。この恒久軍事基地の建設工事によって、莫大な建設工事収入が沖縄にもたらされ、軍工事ブームといわれる戦後はじめて一大好景気が訪れることになったわけです。

この恒久軍事基地の建設に伴い、軍作業といわれる米軍基地労働者が農村や、地方から中南部の基地周辺に移り住み、沖縄の経済も基地依存型経済へと大きく傾斜していくことになったわけです。

当時は学校の先生方も給料が安くて、生活に不安感が強かつたことから、先生を辞めて軍作業や英語の出来る先生は通訳など、高収入の得られる職業へ多く流れていったことなども、沖縄の経済成長が特異な存在であつたといえると思います。

昭和30年から31年にかけては基地建設工事のほか、スクラップ輸出が急増し、また軍用地代も3倍に引き上げられ、さらに日本政府からの年金、恩給の急増等さまざまな対外受け取りの増加要因が重なって、戦後2度目の好況期を迎えたわけです。

先程も話がありましたように、朝鮮動乱などもあって、沖縄はスクラップブームがまき起こったわけです。

昭和30年には前年の3.3倍におよぶ489万ドルの輸出実績がありましたが、翌年には1,170万ドルと前年の2.4倍にふくれあがり、輸出総額に占めるスクラップの割合も58パーセントに達し沖縄経済に好景気をもたらしたわけです。

一方、本土においても朝鮮動乱を契機として、民間企業の設備投資が活発化して、ようやく戦後の復興から再建へと大きく踏み出すきっかけとなったわけです。

このような特異な形で、沖縄経済が発展して行くわけですが、琉球石油を設立した昭和25年頃は、すでにバス会社や琉球海運・沖縄食糧などが相次いで米軍政府の主導のもとに会社が設立されたあとだけに、資金集めに苦勞したことは先にも話した通りです。

石油供給事業といえば、設備投資だけでも相当かかるわけです。事務所と人材を揃えればスタートできるものではないわけです。

米軍政府の試算では、当時の金で運転資金と施設資金を合わせて1億2,000万円が見込まれていましたから、今なら40億円ぐらいに相当する金額になるでしょうね。B円は、戦後、米軍政府が発行した軍票ですが、昭和23年7月の第4次通貨変換のときから昭和33年9月のドル通貨体制に移行するまで、約10年間にわたり、沖縄の法定通貨として使われたわけです。

これを裏返すと、GHQの沖縄を日本から切り離して統括するという政策の一環と見てよいと思います。

その政策を打ち出した背景には、沖縄を極東の要石としての恒久的軍事基地化するために、アメリカに取っては都合がよかったからにほかならない。

ところで、琉球石油設立に関する計画案を、軍政府に提出した後の7月21日に再び設立準備委員会メンバーが同席して協議会を持ちました。

軍政府は、すでにカルテックス社の協力を得て、独自で石油会社設立の骨子をまとめあげていたことがあとで判明してびっくりしたりもしたんですよ。

設立準備委員会に試案を提出させたのは、「単に民主主義的手続きを踏んだ」という形式的なことにすぎず、米軍政府は初めから民間側の計画書をアテにしていなかったとしか思えないですね。

この日の会合には、軍政府からパウエル工務部長、コーラー資源部長、カルテックス社側からはリビングストン副支配人、ヴォス弁護士が出席、民間側からは設立準備委員会の私と佐辺さんが出席して、米軍政府側が作成した協議資料に会社設立に関する諸条件や、事業運営に対する内容についての意見交換がなされたわけです。そこで琉球石油株式会社という社名が決定されたわけです。

意見交換といっても、カルテックス社が作成した提案書の確認と合意のための協議会といったもので、会社設立は、事業計画の段階からカルテックスが介在しておりまして、同社が主導権を握っておいりましたからね。

このような協議会や会合を持つなかで親交を重ね、私が国会議員となっても、日米貿

易摩擦で友人として尽力してくれたのがヴォスさんです。

ヴォスさんは、琉球石油設立当時はカルテックスニューヨークの本社の顧問弁護士でしたが、ヴォスさんにまつわる思い出やエピソードなどについては、次のようなことがあります。

J・M・ヴォス氏は日本政府から勲1等瑞宝章を受賞するなど、ニューヨーク商工会議所会頭として、日本貿易摩擦解消に貢献した日本をよく理解しているアメリカ財界人なんですよ。

私は、琉球石油設立準備の段階から国会議員になってからも親交を結びヴォスさんを通して、多くの友人が出来たことも1つの縁なんだとつくづく思いますね。

私が参議院外務委員長として、日米貿易摩擦解消に取り組んでいたときに、私の要請に基づいて当時の鈴木首相や自民党国際経済対策特別調査会委員長の江崎真澄氏など、ニューヨーク商工会議所会頭として活躍していたヴォスさんと会談をするなどの機会をつくりました。これがきっかけとなって日米の相互理解を深めると同時に、友好親善の増進ならびに石油の安定的供給に寄与したことで勲1等瑞宝章を授賞したわけです。

ヴォスさんは琉石設立してからあとにカルテックスニューヨーク本社の社長、会長を経て現在でもカルテックステキサス本社の相談役としてテキサスでご健在でおります。

私に取りましては、ヴォスさんをはじめ、多くの方々と出会いがあり、このような日米友好親善で貢献出来たことは、誠にありがたいとつくづく思います。

—— 琉球石油を設立するために最もご苦勞なされたのが資金集めだということですが、当時としては大変だったんでしょうね。この辺で株募集の苦勞話をする前に国際情勢においても大きな変動が起きておりますが、その辺からお話をすすめて下さい。

**稲嶺先生** 昭和23年頃、米ソの対立は激化し、それに反映して朝鮮動乱の兆ざしが出てきて、アメリカの沖縄に対する政策転換が変転したといえるでしょうね。つまり、昭和23年7月から米軍が発行したB円という軍票が昭和33年までの10年間法定通貨として使用されたわけです。

そのことによって沖縄は、日本と完全に分断された独立通貨圏と位置づける必要があったんでしょうね。

それをいいかえれば、日本から切り離して統治する第一歩となったといえると思います。

その頃には、北緯38度線を境として南北朝鮮が対立し、動乱へとつき進むわけですが、また中国では蒋介石が共産党勢力に屈して台湾に追われていくという国際情勢がありまして、アメリカの対日政策が180度転換することになったのもその頃なんですよ。

終戦後、アメリカの日本に対する政策は、非軍事化、民主化、財閥解体という政策であったのが、その頃から対日政策が一変したんです。

マッカーサー指令による自衛隊の前身である警察予備隊の編成が、その最たるものですが、現在では日本安全保障条約により、さらにそのきづなは強化されてきております。

—— 琉球石油設立に必要な1億2,000万B円の調達には、いろいろご苦勞されたことを

エピソード等をまじえてお話をすすめて頂きたい。

**稲嶺先生** 当時としては、1億2,000万B円は莫大な金でしたが、あの手、この手で金策に奔走したんですよ。

つまり、資金づくりの目途のつかないまま、設立準備は具体化していったんです。

その年の8月4日の発起人会で創立総会まで臨時役員を決めまして、私が社長になったんです。専務に佐辺良夫さん、取締役平尾喜一さん、長嶺彦昌さん、桃原茂太さんら9人、監査役には山城栄徳さんなどの面々です。

それから、4日後の8月8日には琉水運の間借り事務所から旭町の沖縄海運協会の建物に移りました。琉球銀行からは、会社創立費用として40万B円の借り入れたものの、1億2,000万B円の資金調達はおいそれとはいかない。それから涙ぐましい努力が積み重ねられたおかげで、今日の琉球石油があることを決して忘れてはなりません。

—— そこでもセーファー大佐からいろいろアドバイスを受けたわけですね。

**稲嶺先生** まったくありがたいことにセーファー大佐からは、いくつも具体的な提案がなされましたし、また、琉石誕生に至るまで受けた恩恵は数限りなくあります。

実はこういうこともありました。琉石が企業免許を受ける前日の1950年9月5日セーファー大佐が米軍政府は、琉石の設立資金として6,500万B円（2億円強）を援助する予定だという話をしてくれました。

当初の計画では、6,500万B円に相当する株を米軍政府が買うつもりであったが、そうすると琉石の配当の大半が米軍政府に渡ることになり、琉石の利益が残らないことになる。そこで、同じ援助資金を長期融資資金として出そうと具体的な提案を頂いたわけです。まったくありがたい話なんですよ。

そのかわり、琉石は運転資金2,000万B円と油脂代4,000万B円を準備して、カルテックスと契約してはどうかという話になったんです。結局油脂代の4,000万B円については、琉銀が油脂を担保に貸してくれることになったんですが、どうしても運転資金の2,000万B円の調達の目途がたたないんですよ。

—— 2,000万B円はどのような方法で調達を計ったんですか。

**稲嶺先生** 2,000万B円のうち1,400万B円については、全琉から選出した発起人会のメンバー32人が連帯保証で琉銀から借りることに話が決まり、残り600万B円のうち100万B円については、臨時役員が連帯で同じく琉銀から借り入れ、あと500万B円については、何とか有力者に協力して頂こうということになったが、そういうことは簡単には進むはずがなかったんですね。

そこでまたセーファー大佐の口利きもあって、琉銀の池畑総裁と真栄田副総裁は融資することをこころよく引き受けたものの、またもや、米軍政府から横やりがはいって話はふり出しにもどってしまったんです。つまり、米軍政府のコビントン銀行課長は「発起人連帯で借りる予定の1,400万B円については、担保なしでは許可が出来ないということになったんです。残り600万B円についてもまったく目途のついていない段階でしたので、ほとんど困

ってしまったんです。

そこで、米軍政府のコーラ資源部長に何とか米軍政府の援助をお願いしたところ、カルテックスなら応じてくれるはずだという提案を受けましたが、そうすると、沖縄経済を復興するという会社設立の趣旨が生かされず、逆に琉石がカルテックスの配下におかれるおそれがあるという不安が誰にでもあったため、その話がその後進展することはありませんでした。

しかし、1950年9月末には苦肉の策で1,000万B円の資金をかき集めることに成功したんです。誠に涙ぐましい努力の結晶であったんです。

—— 具体的にはどのような方法で1,000万B円の資金が調達出来たんですか。

**稲嶺先生** それは大城鎌吉、金城賢勇、宇良宗樽さん等の土地を担保にして銀行融資を受けたんです。

しかし、まだどうしても1,000万B円の資金を集めなければいけないので、われわれに残された手段としてはカルテックスの協力を仰がなければいけないと判断したわけです。

一方、株集めの方は1950年8月25日から1ヶ月間の公募期間をきめまして、新聞広告や企業まわりを精力的に進められましたが、その成果は殆どなかったですね。宮古、八重山、奄美大島、沖縄各群島別の割り当てなど全く無駄でした。

そこで、カルテックスに投資させる以外に方法がないという事態を迎えてからは、株の割り当てを無視した形で、なりふりかまわず、集められるだけ集める方法に、戦法を切り換える作戦を展開したわけです。

企業単位で駄目なのは、個人の家を1軒ずつ訪問してタンス預金も出してもらおう意気込みで株集めに奔走したものです。

その結果として、琉石の株主は、そのときの名残りもあって1株主が少なくないんです。いわゆる大衆株主ですね。現在においても会社創立時に買い求めた1株を、額縁に入れて大切に飾っている人も多いですよ。

琉石が今日あるのは、こうして1株主が大勢いてくれたおかげだと思っております。小さな力の結果が大きな力となったわけです。

—— しかし一方においては石油販売について、全琉1社にするという米軍政府との取り決めにもかかわらず、販売会社が設立されていた事実が判明して、その対策にもいろいろご苦労されたわけですが、ことの顛末はどうなったんですか。

**稲嶺先生** 琉石が株集めに奔走している時期に、別の民間会社が神里原に「琉球バンカーオイル合資会社」の看板をかかげて、すでに営業をやっているという情報を社員から報告されたことは、正に寝耳に水というほどびっくりしたものです。

米軍政府は民間に対する石油供給会社を1社にきめ、それに基づいて琉石が設立されたのに別に民間の石油供給会社が堂々と看板をかかげ、すでに営業にはいつていることに不審を持った私は、琉球バンカーオイル合資会社の下田社長に直接あってことの真相を聞いてみることにした。

琉球バンカーオイルのある神里原は、平和通りの奥の一角にあって、戦後いち早くヤミ市が出来たところで、当時はにぎわっていたところでした。

下田社長は突然の私の来訪にびっくりしておりましたが、用向きを話すとさらにびっくりした様子でした。

米軍政府と琉球石油設立に至るまでの経過を説明し、石油供給会社は全琉1社という方針がすでに決定されていることなどを掻摘んで話をし、この経緯についてはだいたい判ってもらったんです。

下田さんの話では、米軍政府の経済部長をしているエバレットさんの勧めで会社をつくったことや、琉石が設立されるので、琉球バンカーオイルの石油供給会社を設立して、果たして営業が出来るかについても心配してエバレットさんに聞いたら、琉石はバンカーオイルは扱わないから君が扱ったらよいということでしたから、安心していたんですが、やはりそうでしたかと困惑した様子でした。

これは米軍政府内部の意志統一がなされていないことが、その原因になっている事実が判明したものですから、10日ぐらい経過してから抗議文をセーファー大佐宛に提出したんです。

琉球バンカーオイルは8月に1,000ドラムを受け取ってすでに販売しているし、また佐敷の馬天に貯油タンクが1基、このほかに貯油タンク3基と1,000ドラムの輸送船を注文して建造中だったんです。琉球バンカーオイルはかなり先行投資をしておりましたので、下田社長と話し合っただけでそれらの施設を買い取ることにしたわけです。

結局、琉球バンカーオイルの施設を60万B円で買い取る話がついたが、琉石も設立したばかりで資金がないわけです。

そこで下田社長に琉石の株をいくらか買い取って相殺をしてほしいとお願いをしたところ、15万B円の株を買っていただき、45万B円は現金ということで承諾をしてくれたんです。

琉球バンカーオイル社から引き取った佐敷の馬天油槽所は、琉石がはじめて持ったタンク施設となったわけです。また、そのときはバンカー社が使っていたタンクのほかに馬天港に沈んでいた軍のタンクを引き上げ3万B円で買いとって、琉球バンカーオイル社が勝連のホワイトビーチに軍補給基地から引きとることになっていた62,000ガロンのバンカーオイルを馬天に運んだんです。

こうして琉石は、琉球バンカーオイル社の出現によりまして、思いがけなく株が売れ、また施設も確保できて、一応販売体制が確立することになったわけです。

自治新報 昭和63年6月、7月、8月、9月、10・11月号掲載、